ナホム書
この短い預言書は イスラエルの最大の抑圧者の一つ
である古代アッシリア帝国と その首都ニネベの破滅を告げる
ものです アッシリアは世界最強の帝国の
一つとして栄えた国です アッシリアによるイスラエル侵略
で イスラエル北王国とその十部族
は滅亡しました アッシリアの軍隊はかつて例を見
ないほどに残虐で破壊的で そのため
イスラエルもその近隣諸国もアッシ リアの滅亡を待ち望んでいて
それは紀元前 612 年に実現しました
バビロンが力をつけてアッシリア に立ち向かい
ニネベを襲いアッシリアを負か したのです
2 章はそのニネベ陥落の様子を詩 の中で鮮明に描いています
3 章は帝国全体の没落を記しています が
それはイスラエルの敵に対する 怒りに満ちた非難だけではありません
導入の章を読むとそれ以上に大きな メッセージもあります
この書は神の栄光の力強さを描く 未完のアルファベットポエムで
始まります これは一つ前のミカ書の始まり
そして次のハバクク書の終わり に似ています
力強い創造主である神は国々に 立ち向かい
彼らの悪に裁きをもたらすために 来られます
そしてこの詩は冒頭で 出エジプト記 34 章の有名な聖句
を引用しています 金の子牛事件の際に神がご自身
について言われた 主は怒るのに遅く力強い方悪を
罰せずにはおかれない という箇所です
詩の残りは 傲慢で残虐な国の運命と神に忠
実な残された民の 運命を対比させていきます
傲慢な帝国が滅ぼされる時 神の前にへりくだった民はかくま
われるのです
興味深いことに アッシリアについて書かれたはず
の本書の 1 章には どこにもニネベやアッシリアの名前
が出てきません そしてナホムはこの悪い国の滅亡
を描くために のちの時代に起こることですが
イザヤがバビロン滅亡について 書いた言葉を用いているのです
それだけでなくナホムは悪者の 滅亡を
神の残された民への良い知らせ として書いていますが

これもイザヤ書のバビロン滅亡 についての
良い知らせを下敷きにしている のです
1 章のこれらの特徴を合わせると 大切なことが見えてきます
ナホムにとってニネベの没落は 一つの例でした
神が歴史の各時代において どのように働かれるかを示すもの
だったのです 傲慢で残虐な帝国が永遠に続く
ことを神は許しません その点で
ナホムのメッセージはダニエル のそれと非常に似通っています
アッシリアは歴史の中に連なる 数々の残虐な帝国の一つです
そしてニネベの運命は神が各時代 における残虐で傲慢な帝国を
必ず滅ぼすことを思い出させる ものなのです
最初の章からこの視点を持ちつつ ナホム書は再びアッシリアに焦点
を当てます
2 章はニネベの戦いと 街が崩壊していく様子を段階的に
描いています まずバビロンの兵士たちが押し
寄せてきて次に戦車が攻めてき ますそして城壁は混乱に包まれ
ニネベは陥落します こうしてニネベ人の大虐殺が始まり
街は略奪されるのです 3 章は都の陥落が帝国全体にもたら
した結果を描いています ナホムはまず
罪のない者の血を流して築かれた 王国の都に降りかかった災いを
記します この箇所はアッシリアを栄えさせ
た制度そのものが いかに不正にまみれていたかを
表しています アッシリアは自分たちで蒔いた
暴力の種によって破滅を刈り取り バビロンに滅ぼされたのです
ナホム書は敗北したアッシリア の王への嘲りで閉じられています
彼は致命的な傷を負いました そして彼がかつて苦しめていた
国々からは 彼を助けに来る者は誰もいません
でした むしろ彼の破滅を喜び歌う者ばかり
だったのです これがこの書のエンディングです
実に重苦しい内容です しかしどの時代でも果てしなく
繰り返される 悲劇的な人間の暴力と抑圧について
ナホムがどう語っているかを知る ことは重要です
人間の歴史は高慢で欲しいもの を手に入れるために暴力を用い
罪のない者を殺す部族や国々の話 で満ちています
ナホム書はアッシリアとバビロン を例に挙げ
それに対する神の嘆きを語っている のです

また神が罪のない者の死を心に 留め
その善と義の性質のゆえに 加害者の国々を滅ぼすことを教えて
います 悪に対する神の裁きは良い知らせ
です もちろんあなたがアッシリアなら
話は別ですが ここで１章の最初の詩の結論が思い出
されます 主は良いお方苦難の日の砦
ご自分に身を避ける者を気に留め られる
ナホム書という短い書は神はいつ の時代もどの国でも
悪しき国を滅ぼされると教えて います
ですから神の義の前にへりくだり 神の時を信頼して待つようにと
読者に呼びかけているのです これがナホム書です

500 字要約

「ナホム書」は短い預言書で、古代アッシリア帝国とその首都ニネベの滅亡を伝えています。アッシリアは世界強国として栄え、イスラエル侵略で北王国と十部族が滅びました。アッシリアの非道な行動から、その滅亡を待ち望む声もあり、紀元前 612 年にバビロンがアッシリアを倒しました。預言の中では、ニネベの陥落と帝国の崩壊が詩的に描かれ、傲慢な国々と神を信じる者の運命が対比されます。この書は神の力強さを称える詩で始まり、神が悪に対して裁きをもたらすことを表現しています。アッシリアの滅亡は神が歴史の各時代に悪しき帝国を滅ぼすことを示す例であり、結局、神に信頼し待つことが導かれます。ナホム書はアッシリアの没落と神の正義を通じて、人間の歴史と神の関わりを考察します。